

くまにち 論壇



恵泉女学園大学長

大日向 雅美

おおひなた・まさみ 発達心理学。「母性愛神話の罠」「女性の一生」「自己肯定で幸せ子育て」など著書多数。74歳。

この春から始まったNHK連続小説「あんぱん」は、高知出身の漫画家やなせたかしさんと妻の暢さんをモデルとした話題作だ。のびやかなやさしさに包まれた子ども時代から青年期までのストーリーに毎朝元氣をもらっていたが、本稿執筆時は第2次世界大戦に突入し、軍国主義一色に染まっていくところ。赤紙一枚で死を覚悟して戦地に赴く若者と万歳三唱で送る人々の姿は、さまざま

な映画やドラマでも見てきたが、その異様さに息苦しくなる。無念さも悲しみも口に出すことが許されない時代の空気もあったと思うが、本気で忠君愛国と信じて疑わなかった人々が大半だった。何が人々をそこまで駆り立てたのか。

先日、その一因ともいえる「子育て論」に触れる機会をいただいた。NHKラジオ「ラジオテキストが教えてくれる戦前の日本」で、「両親再教育」講座のテキストを読み解いた。1932（昭和7）年にNHK大阪中央放送局で放送され、「熱狂的な歓迎」（テキスト冒頭の言葉）を得てテキスト化されたという。

まず「両親再教育」というタイトルに違和感を覚える。子育てに悩みや迷いはつきものであるがゆえに親に寄り添い支えるべきところ、親を

教育するだけでなく「再」の一字が追加されている。ダメな親をいまい度叱責するようなニュアンスは、昨年話題となったテレビドラマのタイトルではないが「不適切にもほどがある！」。

しかし、単に昭和と令和の時代の差ではない。この年は大養毅首相が暗殺され、軍部の政治的影響力が拡大した五・一五事件が起きた年。7月には独議会選挙でナチスが第1党に。8月には文部省がマルキシズムに対抗する日本教学の精神的支柱建設のため「国民精神文化研究所」を設置した。その3年前には、「両親が新しい時代のわが子の教育者としての役割を求められているにもかかわらず極めて貧しい知識、訓練、素養しか持ち合わせていない」という批判に立って、新しい科学の光に照らして親たりうるための教育のやり直しが必要だ」として「両親再教育協会」が設立されている（創設者は上村哲弥氏）。

「両親再教育」講座はこうした最中に放送され、子どもの発達や教育に関する第一線の研究者たちが「科学的知識」を基本とした子育て論を展開している。その一つひとつは今からみてもさほど相違しないものも少なくない。問題は「科学的知識」

が親の責任を強調追及するという一点に集約して使われていることだ。親たちは疑問をはさむことも抗うことも難しかっただろう。

しかも最終回の『青年期』の講座では、青年の心理の解説には「科学的知識」を援用しつつ、こと性教育に関しては、人間の道徳上でとらえて民族活力につなげるべしとする。東洋に道徳の理想郷を樹立すべく、折しも1年前に起きた満州事変を思い起こし、精神を緊張させよとの精神論になっている。子を産まない女性への極めて非人道的差別的な表現もある。『汎く世の両親の自覚を促し、一定の組織の下に、家庭生活並びに児童教養に関する基本知識と訓練とを以て目的とする社会的教育運動』を目指した両親再教育の一翼を担っているようだ。

不思議なのは、講座のトップバッターに倉橋惣三氏が登壇していることだ。「幼児教育の父」とされる氏はその持論を137たりとも崩していない。子どもを心底リスペクトし、親の支援に心を尽くす氏の語り口は「両親再教育」の理念の真逆だが、その後の識者たちの論述は前述の通りだ。氏の意図とは別に「両親再教育」に対する人々の抵抗への懐柔策に使われた懸念も否めない。

「両親再教育」講座を例に、子育て論に時の政治が介入し、人々が挙国一致で戦争に流されていく怖さを垣間見た思いだが、これは戦前の昭和前半のことだけなのか？ 常に社会は有事を語る。当時は「戦争」、今は「少子化」。私たちの暮らしているのは流されてはいけない不変のものもある。それを蹂躪するものを見極めるクールな目は持ち続けたい。

政治が介入した子育て論